

# 伝統的技法による種子鋏製造の技術保持者に対する 聞き取り調査とそれに関わる周辺調査報告

Interview with traditional Tane Scissor blacksmiths and a follow-up study

- ペルトネン純子、中村滝雄、横田 勝／富山大学芸術文化学部  
PELTONEN Junko, NAKAMURA Takio, YOKOTA Masaru / The Faculty of Art and Design, University of Toyama
- Key Words: Kagoshima, Tanebasami(Tane Scissors), Metal, Blacksmith, Hammering Works, Traditional Technique, Smithery Products, History of Iron Making

## はじめに

種子島の鍛冶に関する研究資料は、刀や鉄砲についての資料に偏り、鋏についての資料はほとんどない。鉄砲や刀は、時代の運命を動かす出来事に大きく関わるが、鋏は、あくまでも人々の暮らしと関わるのが中心であり、社会にその存在価値を示す機会が少なかったと容易に考えられる。つまり庶民の歴史の中に埋もれてしまい、これまで注目されることがなかったといえるのではないだろうか<sup>1)</sup>。

そうした中でも、我々が収集した種子鋏に関する資料は次のとおりであり、またその内容等はおおよそ以下のように分類できる。

- ◎種子鋏の歴史・形式的特色・由来、種子鋏の鉄材・製作工程、種子鋏の現状と展望等について。図解、写真。(『種子島の民俗 I』<sup>2)</sup>)
- ◎種子鋏の起源、製鉄遺跡、鍛冶屋の祭り、鍛冶炭、製作工程、生産量の推移等について。図解、写真。(『日本民俗文化大系〔普及版〕第14巻、技術と民俗(下)』<sup>3)</sup>)
- ◎種子鋏の歴史、文化的側面、時代背景等について。(『用と美—南日本の民芸—』<sup>4)</sup>、『南日本文化史』<sup>5)</sup>、『かごしま文庫 種子島』<sup>6)</sup>、『郷土史料集4』<sup>7)</sup>、『ものと人間の文化史 33 鋏(はさみ)』<sup>8)</sup>、『鉄砲伝来前後—種子島をめぐる技術と文化—』<sup>9)</sup>)

これらのような資料を眺めてみると、種子鋏製造に携わる者から直接調査を行っているのは、下野氏のまとめた資料\*1のみのようであるがその内容は、製作工程で呼ばれる名称についての説明が中心を占めている。そこで本調査は、種子島で現在もすべて手作りで種子鋏製造を行う牧瀬義文・博文の両氏に依頼をし、鍛冶職人の記憶を手がかりとした技術の伝承方法や鍛冶周辺の習俗のこと等を調査ノートとして報告することとした。

以下の内容は、両氏からの聞き取り調査をもとにしているため、学術研究の資料としては信憑性にかける点もあると思われるため、記録された内容について文

献資料などで検証すべきであるが、その点については今後の調査としたい。また本調査内容を可能な限りそのまま残したいと考えたため、質問時の言葉、回答時の言葉の修正などは、ほとんど行っていない。しかし鍛冶技術を熟知した者、あるいは聞き取り調査現場に立ち会った者でなければ理解しにくい点については、部分的に文中の( )に説明を加えることとした。なお、本調査の質問者は研究者の筆者ら3人だったが、そのうちの誰が質問したかは問わず、たんに質問者とし、それを指し示す記号は[質]。また質問に対する回答者としての牧瀬氏を指し示す記号は、[牧]とする。

## 1. 種子鋏鍛冶の祭事

[質] 今までずっと、お父さんに教わってこられましたよね?でも、以前聞いたときには、あんまり教わらなかったというお話でしたけれども?

[牧] おう。見てとれつつな。

[質] もうほとんどまったく?

[牧] まったく。

[質] 言葉では?

[牧] 言葉では、絶対(教えられなかった)。

[質] で、小さい時に向鋸を打ち始めて、やっぱりそこで見ながら?

[牧] そうやろうな。やっぱり、自然と見とったおかげでな。

[質] やっぱり、どのくらいの(温度の)時に叩くかとか?(材料が)どういう色になったら、鍛接する(温度)とか?焼入れする(温度)とか?全部ですか?

[牧] 子供の時から鍛冶屋、鍛冶屋で遊んどったから。自分の鍛冶屋ばかりでなしに。他の鍛冶屋にも行って。

[質] でもそういう(ほかの鍛冶屋に行く)事というのは、普通なんですか?自分とこの技術っていうのは、あんまり外に出さないっていう習慣っていうのはな

かったんですか？

[牧] 昔は可能。鋏(鍛冶)の場合にはなかった。昔は共同で、解らんときには、教えたりしよったからな。そやから、どの鍛冶屋行っても、遊び行っても、拒むことはなかった。子供が自由に遊びに行ってもな。じゃから、その度、自然と見らんふりしとって、見とったわけや。自然とでけたわけや。

[質] でも日本刀だとかを作る時には、ほとんど見せないですよね？

[牧] 見せないわな。あれは、あの、粘土の付け方もあるし。

[質] あの波紋のね？

[牧] うん、波紋の付け方もあるし、温度の加減があるからな。銘々にな。

[質] よく焼入れの時、温度を知るために水に手を入れたら、手を切られたとか？

[牧] そうそう。昔こっちでも、だいたい刀の場合は、絶対入らせんけ。

[質] でも鋏の場合は、そういうことはなかった？

[牧] なかった。鋏の場合は、ほとんど解らんし、教えたり。そいで、金床作るときは団体で、みんな寄り合うて、この金床をこしらえたりしてたわけやから。金床祭りっちゅうてな。

[質] あ、金床祭りっていうのがあるんですか？年に1回とか2回とか？

[牧] そうそうそう。

[質] 作り変えるというか？新たにするために？

[牧] そう。

[質] それぞれの仕事場にみんなが寄り集まって？

[牧] う～ん、なんか謂れがあったが、俺も、もう忘れとる。聞いてったけども。この頃そういうことがなかもんで。霜月を嘗て、その日が金床祭りやっちゅうてな。

[質] それは、いつ頃まであったんですか？

[牧] えっと、おやじ、俺が小さい時まで、あったとな。みんな寄り集まって。

[質] それで、お祝いするわけですか？

[牧] そうそうそう。

[質] いわゆる、鞆祭りっていうのですか？

[牧] うん、そうそう。鞆祭りな。鞆祭りが金床祭りやったんな。

[質] じゃ、そういう仕事もして、お祭りもその仕事が終わった後にやるっていう感じですか？

[牧] そうそうそう。昔はあの、掛け軸もあったからな。神様が、こう、あの、猿が釘を刺して、ヤタガラスが、こう、おったからな。掛け軸にな。

[質] その掛け軸は、もう無いんですか？

[牧] もうぼろぼろになって、薄黒うなって、博物館に寄付したけども、もうものにならんちゅうて。

共同で技術指導が行われ、共同で道具制作が行われ、さらに鍛冶周辺で有名な祭事である鞆祭りは、そうした共同で行う仲間同士で開催されていたようである。職人技術の伝承で通常考えられている技術の秘密の保持というものが、少なくとも牧瀬氏が種子鋏に関わった時代における種子鋏鍛冶の周辺において該当しないということが、この聞き取り調査によって判明した。

牧瀬氏が語る鞆祭り(金床祭り)とは、今も金属加工に関わる人たちの間で広く行なわれている祭事である。野鍛冶、刀鍛冶、鋳物師、銀細工師、かざり職だけでなく石工や大手製鉄会社、冶金会社、鉄道会社においても、火や鉄に感謝し、安全や火災予防を祈願する祭りの日となっている。地域や職人の家によっても違うが、一般的には旧暦の11月8日に行われ、新暦が導入されてからは、そのまま日取りが新暦に対応させたところが多い。<sup>10)</sup> 種子島の場合、この祭りの日は11月8日に行なわれているようである。<sup>11)</sup>

牧瀬氏の鍛冶仕事場にヤタガラスが描かれた掛け軸があったということは、熊野信仰とのかかわりを予測させる興味深い事実である。ヤタガラスとは、「八咫鳥」と書き熊野権現神使の3本足の鳥で、一説には天・地・人をあらわすともいわれている。<sup>12)</sup> また、平成6年に撮影された牧瀬家の妃の神を祭る神棚には、手錫杖と矛が供えられている。<sup>13)</sup> その供え物は、僧侶・修験者の持つ道具であり、修験者と熊野信仰のつながりは深いとされ<sup>14)</sup>ており、種子島の鍛冶と熊野信仰との間には、強い絆があったのではないかと推測できる。また種子島には熊野という名称が付く場所などが多くあり、種子島の鍛冶とのつながりだけでなく、種子島全体と熊野信仰との関係が深いのではないと思われる。元種子島博物館(鉄砲館)館長の鮫嶋安豊氏から伺った話によると、種子島は法華宗の島であったが、十代目の領主が熊野信仰に転向した経緯があるため、種子島には熊野信仰の風習や慣習が残っているのではないかと推測できるそうである。またその上、領主が熊野信仰に転向したことだけが唯一の要因ではないと思われることもある。熊野三社のうちの熊野本宮と熊野新宮は、産業の信仰ではないかとされ、熊野本宮第三殿に鍛冶の神である香具槌命、辰砂の神である埴山姫命と罔象女命を祭っており、これらの神は、錬金の神であり、鉾山の神であり、鍛冶の神と考えられているからである。<sup>14)</sup> こうしたことも、種子島の鍛冶と熊野信仰を強く結びつける要因となったと推測すること

ができるのではないだろうか。民族学的なことは専門外のことであるが、鍛冶の歴史と熊野信仰の関係について研究することは、日本の鍛冶文化の重要な一側面を解明する手がかりになるのではないかと考えられる。

## 2. 種子鉄鍛冶の風習

[質] 焼入れのときは、柿の色に熟した色、とか焼入れのときの水の温度は、赤子の体温とか言っていたようですが？

[牧] そう。鋼の質にもよるけどな。赤味のな。

[質] 普段は白紙\*2使ってて、青紙\*3になるともうちょっと温度が高くなる？

[牧] いや、低くなる。低くせねば、青紙の場合、脆くなる。

[質] 硬く入りすぎちゃう？

[牧] そうそう。

[質] 今、伝えられている言葉っていうのは、その二つぐらいですか？

[牧] いろいろ教わってきたけど、言葉はほとんど忘れてしもうとるわい。だいたい今、それを言うことは、滅多になかわけやから。鎌を作るわけでもなし、鎌に傷をつけてあるだろ？あれにも謂れがあったが、もう忘れてしまった。

[質] ああ、あの4本か5本、筋が入っているやつ？

[牧] はいはい。あれ、一つ一つ謂れがあって、それを聞いたけども、もう完全に鎌を作らんから。

技術習得のために多様なことを教わってきたが、どのような言葉で指導されたかだけでなく、鍛冶にまつわる風習でさえも忘れ去られてきていることが伺える会話のやり取りである。社会や経済の発展に伴い、新しい技術や生産様式が発展してくると、これまで行なわれてきた儀式は意味のないものとなるか、変容する可能性が高くなると考えられる。手工的技術や道具による生産が存続するかぎり、職祖神への儀式は継続されると考えられるが、それは形骸化していくと予測される。また、家業として職業が代々受け継がれないかぎり、そうした儀式の役割は失われていくものと考えられる。<sup>15)</sup>そして鍛冶屋仲間とともに技術を受け継ぐ者たち、つまり共同体を失うことは儀式や風習だけでなく、どのような指導を受けてきたかを振り返る契機を失わせ、技術伝承の具体的な方法や長年培われてきた貴重な技術自体を失わせることになるのではないか。

## 3. 徒弟と技術の修得

### <1>

[質] 鍛造の時は、こうしろとか、ああしろとかいうようなことも？

[牧] いや、絶対教えんかったな。どこが悪いかわかりたくても、自分で考えて、絶対教えん。

[質] 聞いても、自分で考えると？

[牧] そう。

[質] でも、そういうことは、どうやって確かめたりとかしたんですか？

[牧] 親父が作ったものを、取って見たりして、ここは違うてるかな？とか思って、それで直していく。

[質] 形を比べてみたりとか？

[牧] うん。

[質] 焼入れなんかは、例えば、割ってみて、その断面を見るなんてことは、されたんですか？

[牧] いや。あの～、そこまではせん。焼入れの場合は、じ～っと温度と運ばす姿を見とるだけやね。絶対目を離すなと言われとったからね。だいたい鍛冶屋の中でも、鼻歌なんかを歌っていたら、後ろからバ～ンと焼けたものが飛んできよった。

[質] 鍛冶屋の本を読むと、言葉は絶対駄目だって書いてあったんですが？言葉で伝えるんじゃないで、金鎚となんかで？

[牧] 体で覚える。いつでも体とで、覚えるんじゃない。体で覚えたものは、絶対忘れんから。

[質] でも、実際に叩かれている時に、違う、とかというようなことも言われないのですか？

[牧] 言われない。

[質] どこが違うとかではなく、それでは駄目だとかいうようなこともないですか？

[牧] ない。

[質] じゃあ自分で悪いところを探して、自分で治すしかない？

[牧] そう。厳しかった。でも、それに逆らって、出て行くわけにもいかんし。昔は、絶対やったから。

### <2>

[質] (製作中の鉄を見ながら、説明。鋼を鍛接するとき、鉄の最終的な形状を基準にして、上面におくのか？側面におくのか？という方向の話を質問している。)

[質] 牧瀬さんは、こう置きますよね？でも、こうゆうふうになれる人もいると本で見たのですが？

[牧] 昔はおったと。ところが、こうゆうふうに置いた場合、叩くうちに後ろに鋼が回りすぎる場合がある。

[質] 鋼の方が回っちゃうんですか？

[牧] うん。しのぎを叩くときにね。そうした場合は、削り取らんといけんことになる。

[質] は～。そうすると、それだけ、もったいないということに？

[牧] そうそう。

[質] え？こう置いたときに、え～っと？

[牧] あんな、打ち方あつと。伸ばしてしのぎを打つときに、鋼が後ろに回る。ぐっと下がる場合が多い。そしたら、仕上げの段階で、鋼の部分まで削り取らんといけんから、形もおかしくなってくる。そうゆう人は、こうして叩く。(ポーズをとって説明している)押さえうちのように、引き手を下げた状態にして、鋼が回り過ぎないように叩く。だから歳をとったときに、肩が変形してしまう。そやから、絶対親父はそうゆうことをするなって。肘を必ず(胴体から)離して、叩くようにしなければ、(体、特に肩の辺りが)変形してくる。歳をとったら、こんなになってる。全部そうゆうような(変形した体型の)人になった、引き下げて叩いていた人。

[質] やっぱり、こっちに置くよりは、横に置いた方が、簡単？

[牧] 簡単は簡単やけど、うちのような叩き方では、回りすぎる。(でも、もう一つの叩き方は、)右腕を(ぴったりと体に)つけたようにして、こうゆうふう(叩いてる材料に対して金鎚をまっすぐ振り下ろせるように)して叩かねば、まっすぐには伸びらんわ。(鋼が)回り過ぎないようにして、叩かねば。

[質] なるほど。そうゆうことを気にして、ずっと鍛造をおこなうよりは、斜めにおいて、まわしながら打つほうがぜんぜん効率が良いと？

[牧] そうそう。それもあつし。体も変形しない\*<sup>4)</sup>。そのほうがあたるの、うちの叩き方のほうが。こっちの(もう一つの打ち方)は(無理な)力があるから。

[質] 先代の前は、もしかしたら、違うやり方をしていたんですか？

[牧] ずっと一緒(の方法で叩いている)。

[質] 本当に多くの本では、平置きという横に置いて、鍛接すると書いてある。牧瀬さんだけが違うのかと？

[牧] いえいえ。こちらでは、一人しかおらん。

[質] それは、日本刀を作っていたからとかいう問題ではないのですか？

[牧] ないない。日本刀の場合、斜めにしとらんからな。

[質] そうですね。和床なんかも平らですもんね。

そうか、それで、金鎚の斜めとかが生きてくるわけですね？

[牧] そうそう。その品物に応じて。あれで、刀ができんことはないんやけども、やはり、まっいたらに長いものを作るには、平らな方がいいんじゃ。これもぜんぜん短いわけじゃな、刃渡りが。やっぱり用途に応じて、作るから。

[質] 今の方法は、牧瀬流という事になるわけですか？

[牧] う～ん。

[質] よくそうゆうふう(に、平置きにした人は、鋼が出てくるので、かなり削らなきゃいけないので、削るのが大変だということ)を聞きます。牧瀬さんのような形で、こっちとこっちに回してけるとなると、ここはもう鋼ですから。

[牧] そうそう。そのままの状態。

[質] 簡単に形を整理するだけで、できてしまうという。だから後々のことを考えるとすごく効率がよいやり方なんだと思つて。だけど、まわすつてことは非常に大変で、やらないというかできない人が多いんじゃないかと？

[牧] いや、そんなに大変なもんじゃない。一打ちでまがつてるわけやから。跡はもうそれを伸ばしちゃうばいいわけで。ただこの斜めを打ちすぎたり、回りすぎたりするわけやからな。

[質] いやあ。やっぱりそこに気がつくか、つかないかの差なんですか？

[牧] そう。鋼、見るから、わしゃ。やっぱり、どれがどの部分でとね。

[質] 20軒あつた中で牧瀬さんのところだけが、それをやってたんですよね？

[牧] (この辺りに)鍛冶屋は20軒以上あつたよ。

[質] でも、そうゆう牧瀬さんのやり方でやっていたのは、牧瀬さんだけ？

[牧] いや、たくさんおつたよ。

[質] え？牧瀬さんのほかに？

[牧] いやいや、ほかに、そうゆう打ち方をしよつた人がいた。

[質] あ、牧瀬さんのほかに一人だけ？

[牧] そう、(あの当時は)一人だけ。その人はもう、年をとつて、えっと、何年ごろ死んどつたかな。もう肩が、こんなになって。

[質] あ、横に乗せて打つていたのは、その人一人だけ？あとはみんな牧瀬さんと同じように、刃のところに乗せて？

[牧] そうそう。みなそうゆう打ち方やつた。

[質] この島の職人さんたちは、牧瀬さんと同じうち方でやっていた？

[牧] そうそう。

「焼入れの場合は～絶対目を離すなどと言われとった」という話から推測できることは、鍛冶技術にとって大変重要な点については、しっかり盗め、と指導されていたと捉えることができるのではないだろうか。そしてその後述べている「体で覚える。～体で覚えたものは、絶対忘れんから。」という言葉には、技術習得を目指しながら親方の仕事を必死に盗み、自らの努力で試行錯誤を続けてきた職人の自信が伺える。この試行錯誤をする能力がなければ、卓越した技術を持つ職人にはなりえない。

技術習得の段階において、師匠の技術を盗む力つまり観察する知力と、その観察によって得られた情報を実行に移す能力がなければ、技術向上はありえない。逆な視点から見れば、その技術習得の巧みなバランスを持った者でなければ、師匠の下を離れたとき、自らの力で試行錯誤を繰り返しながら優れた職人となるのが難しいのではないだろうか。そのため技術習得過程においてその能力が試されるような指導のあり方を採ったとも考えられるのではないだろうか。また、五感を通じた試行錯誤には、長い徒弟期間が好都合であったといえるのではないだろうか。

職人の階層を示す言葉は、一般には徒弟、手伝、親方の3階層があると言われる。通常、非血縁のものが雇用労働力として、その技術指導者の家の家族の一員として入り、技術の習得を契機として形成される社会的な関係が、徒弟制を確立させる要因になる。また徒弟制を成り立たせるもう一つの要因に、職人の横の関係、つまり同業者相互の組織が深く関わっている。この横の関係と、その技術の難易度や職種によって、修行期間や技術の保持に関することが決められていた。そして一般に、徒弟としての修行期間は長く10年、もしくはそれ以上になることもある。手伝は、一般に職人とも言われるが、徒弟生活を終えて独り立ちした者の事を指す。徒弟生活を終えた職人は、手伝として親方の下にとどまるか、地方を巡り経験を積むことによって、自分自身を技術的にも人間的にも高めさせ、手に持つ技術の需要のある地域に赴いてその力を提供するのである。そして最後に、熟練した技術を持つ者が親方になる。<sup>16)</sup>

牧瀬氏の場合、親方が血縁者でありながらも、厳しい修行を越えて、熟練した技術を保持する職人となりえた。しかし残念ながら、牧瀬氏にはその技術を指導する後継者がいない。非常に残念なことである。

長期に及ぶ職人の技術の積み重ねや知恵をいかに後世に伝えていくべきかについて、感心を持たずにはいられない。技術伝達の一手段であった徒弟制度関係がなくなりつつある現在において、その技術の伝え方は確実に変化してきている。そのような中で、徒弟制度を通じて技術というのはどのように伝えられたのかを、再度見つめなおす必要があるのではないだろうか。

## おわりに

今回の聞き取り調査は、鍛冶職人の記憶を手がかりに、過去の伝承方法や技術周辺のことなどを知ることができた貴重な調査であったと考える。特に種子島周辺の出来事について、民族学的な方面からの専門的なアプローチを更に加えることができれば、種子島にとどまらず、日本の新たな鍛冶文化を探ることができるのではないかという可能性を見出すことができたのではないかと考えている。また特殊とされていた職人技術指導方法についても、今後より詳しい調査や研究を進めることで、有効な教育手段として捉えていくことが可能になるのではないかと期待している。

本研究の一部は、平成17年度富山第一銀行奨学財団研究助成金、ならびに平成16年度および17年度 科学研究費補助金（基盤研究C-2、課題番号16500636 研究代表者 中村滝雄）の研究助成によるものであり、ここに記して感謝の意を表します。

## 注釈

- \* 1 下野氏のまとめた資料 下野敏見『種子島の民俗 I』法政大学出版局、pp.254-264、1982
- \* 2 白紙（しろがみ） 日立製鋼のヤスキ鋼の種類
- \* 3 青紙（あおがみ） 日立製鋼のヤスキ鋼の種類
- \* 4 右利きの鍛冶屋の場合、左手で材料をつかんで、右手で金鋸を振り下ろす。その動きを点で示すと、左肩、右肩、左手でつかむ材料が基準の3点となる。左肩と右肩をつなげる線は、胴体の位置となる。両肩から左手でつかむ材料をつなげる線は、両腕となる。両腕が、それぞれの基準点となる各肩を軸に上下運動するのは、自然な動きである。金鋸は肩から振り下ろされることで、力を容易に入れることができる。しかし左手でつかむ材料の地点から、胴体に向かって垂直な線を下ろすとする。その線は、右肘から右腕にかけ手を表す。肘だけの力で、通常金鋸の力を利用しようとする場合、相当な腕力が必要になる。その上、

右肘を胸部前方に固定しなければならないため、右肩に異常な負担がかかる。その結果、体型が変形してしまうのである。

#### 参考文献

1. 金子厚男『西日本・手の文化史』未来社、p.11、1984
2. 下野敏見『種子島の民俗Ⅰ』法政大学出版局、pp.254-264、1982
3. 鮫嶋安豊『日本民俗文化大系〔普及版〕第14巻、技術と民俗（下） 種子鉄』小学館、pp.412-413、1995
4. 『用と美－南日本の民芸－』未来社、p.54、1966
5. 川越政則『南日本文化史』北山書房、p.166、1950
6. 井元正流『かごしま文庫 種子島』春苑堂出版、p.171、1999
7. 『郷土史料集4 種子鉄』西之表市立図書館、pp.1-1
8. 岡本誠之『ものと人間の文化史33 鉄（はさみ）』法政大学出版、pp.99-101、2001
9. 井塚政義・飯田賢一監修、種子島開発総合センター編『鉄砲伝来前後－種子島をめぐる技術と文化－』有斐閣、pp.103-106、1986
10. 下野敏見『種子島の民俗Ⅱ 製鉄技術と鍛冶技術』法政大学出版、pp.288-30、1990
11. かくまつとむ『鍛冶屋の話』pp.67-69
12. 熊野本宮大社資料
13. 『種子島民俗調査報告書（1） 西之表市の民俗・民具 第1集』鹿児島県西之表市教育委員会、口絵写真4、1997
14. 宮家隼『民衆宗教史叢書21 熊野信仰』雄山閣出版、pp.8-11、1990
15. 遠藤元男『＜日本職人史の研究Ⅳ＞日本職人史百話』雄山閣出版、pp.104-105、1998
16. 遠藤元男『＜日本職人史の研究Ⅴ＞建築・金工職人史話』雄山閣出版、pp.342-344、1998